

巻頭言

留学生センター長 五味政信

この一年を振り返り、留学生センターの新たな動きについて報告しよう。

昨年 2004 年 10 月から「日本語日本文化研修留学生（日研生）プログラム」がセンター内にスタートした。第一期生は韓国からの留学生 2 名のほか、シンガポール、ベトナム、モンゴル、米国、スイス、ハンガリー、ポーランド、中国からの留学生がそれぞれ 1 名の計 10 名。定員 10 名の、規模の小さなコースだが、そこに集った留学生たちは日本語・日本文化に対する興味と鋭い視点をもつ、魅力的な学生ばかりだ。日本近代文学や江戸の出版文化といったテーマから、日系企業における外国人労働者の問題、日本政府のミサイル防衛システム導入の問題まで、その関心は幅広い。彼らは留学生センターで日本語・日本文化を学びつつ、学部科目、全学共通教育科目（教養教育科目）を受講し、さらに学部 3 年ゼミにも参加している。日研生も一般の学部学生と同様に、一橋大学の特長の一つである学部ゼミナールでのきめ細かい指導を享受できること、このことが本プログラムの核となっている。彼らは留学生同士の交流だけでなく日本人学生、地域のボランティア組織との交流も盛んに行っている。日本をよく知るコスモポリタンに成長することを期待したい。

本年 4 月からは連携講座「日本語教育学位取得プログラム」がスタートした。この講座は本学大学院言語社会研究科の中の一講座として新たに設置され、言語社会研究科と留学生センター、そして独立行政法人国立国語研究所の三者の連携によって運営されている。三者の連携という形で運営するという新しい構想をもって、準備・企画から 3 年を経て実現した講座であり、留学生センター教員の専門性を生かした、大学院教育での人材養成という道が確保された意義は大きい。実践的な日本語教育の現場をもつ留学生センター、先端的な日本語研究を行う国立国語研究所（この 3 月に隣町の立川市に移転した）、そして多言語多文化の問題を多角的に考察する言語社会研究科が、それぞれの特長を持ち寄ることによって、日本語教育学、日本語学についての専門性と、社会・言語・文化に関する洞察力、そして国際性を備えた日本語教育者を養成することを目指している。こちら定員 10 名のこじんまりしたコースだ。第一期生 13 名（日本人学生 7 名〈日本語教育経験者 3 名を含む〉、留学生 6 名）の、家庭的な温かい雰囲気を大切にしつつ、彼らの成長とこの連携講座の一層の質的充実を期したい。

さて、本年 5 月、文部科学省派遣の「中国高等教育事情調査団」のメンバーとして中国の 9 つの大学を訪問した。日中間の政治問題が取りざたされている時期でもあり、両国間の教育交流、留学生交流について両国の担当者が語り合うことの重要性、平和を担う若者を育てる教育者の責任を日中双方の大学関係者が一致して確認する機会となった。

訪れた大学はいずれも有名大学であったとはいえ、どの大学も、広大な敷地、整備されたキャンパス、十分な設備を備えた美しい建物、ホテルのような留学生宿舎を有していた。同時に施設や設備だけでなく、優秀な学生や教職員の採用方法、カリキュラムの改善、大学経営の効率化などの面でも、中国の高等教育における充実振りを垣間見ることができた。そして、9 つ全ての大学で留学生の最大多数は韓国からの留学生であった。留学にかかる経費の面でも、宿舎の面でも、そして経済成長に関わる面からも、少なくとも、韓国の留学生の場合、留学先として日本ではなく中国を選ぶ傾向に推移していることは間違いないだろう。この傾向がアジアやオセアニア、そして欧米の留学を希望する学生へと拡大するとすれば、日本の留学生受入、ひいては大学教育全体に何らかの影響が及ぶことは避けられないだろう。日中間で競争できる分野は教育研究の質の面だけであろうが、日本に先駆けて 2003 年から独立行政法人化した中国の国立大学はどこも、教育研究の面でも熾烈な競争に打ち勝つべくたいへんな努力を払っており、手強い競争相手であることは間違いない。どの大学でも図書館の閲覧室や授業のない空き教室で、向学心に燃えた中国の学生達が熱心に自習している姿が印象的であった。

国立大学法人化 2 年目を迎えた大学にあって、我がセンターは仕事の効率化と事業の拡大を求められている。日本語教育部門と留学生相談部門の 2 部門体制の中で、これまでの日本語教育と修学生活指導の業務、新たに加わった日研究生プログラムの運営、連携講座への参画、そして今後は、日本人学生の海外派遣事業の環境整備などの面で、今年度設置が認められた「一橋大学国際戦略本部」との協力などが日程にのぼってこよう。法人化 2 年目は早くもその真価が問われる年となっている。

2005 年 3 月末日をもってセンター兼務教員の松岡弘先生（社会学研究科教授、現慶應義塾大学国際センター教授）が定年退職され、また中本進一先生（法学研究科講師、現埼玉大学留学生センター助教授）が転出された。松岡先生は一橋大学における最初の日本語・日本事情担当教官として 1986 年に赴任され、以来 20 年にわたって一橋大学の日本語教育、留学生教育の支柱として活躍された。1996 年 5 月の留学生センター設立時から 4 年間センター長を務め、センターの揺籃期に規則面での整備から実際の運用に至るまでリーダーシップを発揮され、現在のセンターの確固とした土台を築いてくださった。また、中本先生は 2002 年 4 月に法学研究科に着任以来、センター兼務教官をお引き受けくださり、留学生の修学生活相談、センターの日本語研修留学生に対する教育、国際交流での新たな事業の企画などでその力を存分に発揮くださった。松岡弘先生、中本進一先生の教育者としての熱意と、確固とした信念に裏打ちされた指導に心よりの感謝を申し上げるとともに、新たな職場でのご活躍とご健勝をセンター教員一同祈念したい。

2005 年 7 月